

他職種共同の支援ひろがる

避難所訪問・外来支援でフル活動

東京保健生協の現地支援部隊第2陣8名が20日20時半無事に帰任しました。

現地では医療支援や物資を避難所に届ける活動などを担いました。根岸先生や看護師は避難所まわり、2人の若手医師は外来当直にはいるなどフル活動だったそうです。

また、健生病院から出発した19日夜、「緊急車両」の張り紙をみたタクシーの運転手さんが車から降りてきて「実家がいわき市です。被災地に渡してください」と1万円札を渡されたそうです。

大泉生協病院から東京民医連の支援部隊とともに現地入りした小山看護師も21日に帰任しました。

「坂総合病院にむかう途中の若林地区はさながら車の解体会社のような状態でした。津波被害にあった車が何キロも放置されていました。救急外来の勤務をしてきました。風邪やめまいの患者さんが多かった。坂総合病院の先生方は疲れきっています。昨夜は2人の赤ちゃんが誕生しと嬉しいこともありました。」と報告を寄せてくれています。(東京保健生協 対策本部ニュースより)



避難所でも薬剤師の専門性を発揮！

この間全国からのべ30人余りの薬剤師が支援にかかわっています。私は19日から21日までの3日間全日本の支援部隊として大型バスで現地支援へ行ってきました。

到着後はつばさ薬局へ支援に入りました。薬局の金田社長からの話では門前薬局が閉まっている一部の開業医などからの処方箋もきているということで、この週末には多い日で1日700枚以上の処方調剤をこなしているとのことでした。薬袋は震災以後ずっと手書きで、自前のものがなくなったため、京都や利根中央病院のものも使われていました。もちろんレセコンに入力もしていないため、その分の仕事が今後大きく残ります。土曜日の午後だったので常勤スタッフは少なかったのですが、疲れた様子も見せず頑張っていました。

20日は支援者11名のうち4名がつばさ薬局、2名が病院、5名が避難所訪問等にかかわりました。避難所訪問に薬剤師がかかわったことにより21日朝の全体集会では「薬剤師の専門性が発揮された」と評価されました。私の行ったところでは、普段血圧の薬を飲んでいない方でも180/100などと高く、そのような方にはアムロジピンが投与する方が目立ちました。医療班はすべての被災者に声をかけ希望者には診察を行い、治療上のアドバイスを行いました。昼は自宅の片付けのために家に帰っている人も多く、その人たちが戻る夜間帯に1隊が訪問しました。

金田社長から、普段は当たり前と思ってやっている調剤業務が特にマンパワーが不足しているなかで貴重な仕事であること、患者さんが薬をもらえたことで感謝されることで、本当に大事な仕事であるのだということがしみじみ語られました。つばさ薬局は多賀城だけでなく他の地域もあり、引き続き薬剤師支援が必要だと改めて感じました。(株式会社地域保健企画 島野清)



西都保健生協理事

朝日健二さん 来訪

現地への支援物資毛布とタオルを届けていただきました

「計画停電」対応と被災地患者受入れに尽力

東葛病院では東京電力から翌日の計画停電の連絡を管理部または警備で受け、停電地震災害等の連絡網に従い院内連絡体制をとっています。

朝夕の会議では、通常の医療報告以外に停電連絡の確認、水道関係等必要なことがあれば全体で確認するようにしています。

また流山市から連絡があり、被災地相馬市の患者10人受け入れてほしいとの相談を受けました。紹介状等がなくても救急外来で受けるよう院内で対応しています。



照明を消して外光で仕事をする
ナースステーション